# ボランティア学習に関する一考察
## ボランティア論受講生の作文の分析から

石　田　易　司
福　山　正　和
金　本　拓　也

**キーワード：ボランティア，初体験，学習，学校教育，**
**アクティブ・ラーニング**

目次

達人への道のり
達人と学生の活動の違い
　①体験の違い
　②時期の違い
　③活動の動機
　④活動の継続性
　⑤参加の形態
　⑥効果
　⑦コーディネート機関
達人への道
結論

### 達人への道のり

大阪ボランティア協会が発行するボランティア情報誌・ウォロに「ボラン

ティア初体験」という連載記事がある。もう 10 数年にも渡る連載で，100 人をはるかに超える人が登場している。ウォロ編集委員会がボランティア活動の面白さを伝えるために選んでいる人たちだから，これまで日本のボランティア活動の推進に大きな貢献のあったいわゆる「ボランティアの達人」たちに違いない。

一方，筆者は勤務する文化系総合大学で「ボランティア論」という授業を担当している。大学で今，それなりに流行っている「アクティブ・ラーニング」という受講者主体の体験的な学習をしようとシラバスを書いたら，なんと 500 人を超える受講者が登録して，初日から挫折した。

しかし，何とかしなければと，実際に地域でのボランティア活動に参加してもらい，活動日誌を書いてもらうことや，ボランティアに関する本を読んで感想文を書いてもらうなど，いろいろ工夫をしてたどり着いた一つの方法が，学生にものを書いてもらい，それをみんなで検討するということだった。その一つとして，ウォロと同じように自分のボランティア初体験をエッセイ風に書いてもらった。今回のデータは 2014 年度ボランティア論受講生 375 人，ウォロによる達人 128 人の比較である。

その作文を整理していて，驚いた。多くの学生が大学時代までボランティア体験をしたことがないということや，多くの最初の体験が掃除や草引きなど，地域の環境整備の体験なのだ。その偏りとウォロの「ボランティア初体験」登場者を比較して，達人への道のりを考えてみようというのが，この文章の目的である。

## 達人と学生の活動の違い

元のデータはともに文章だったので，初めての活動時期，その活動のテーマ，活動の形態，動機などの枠組みを作り，文章をその枠組みの中に落とし込んで，基礎データにした。例えば，ウォロ筆者の初体験が，学生に合わせた大学時代までの年代区分に合わず，その他が圧倒的に多いなど，学生用に

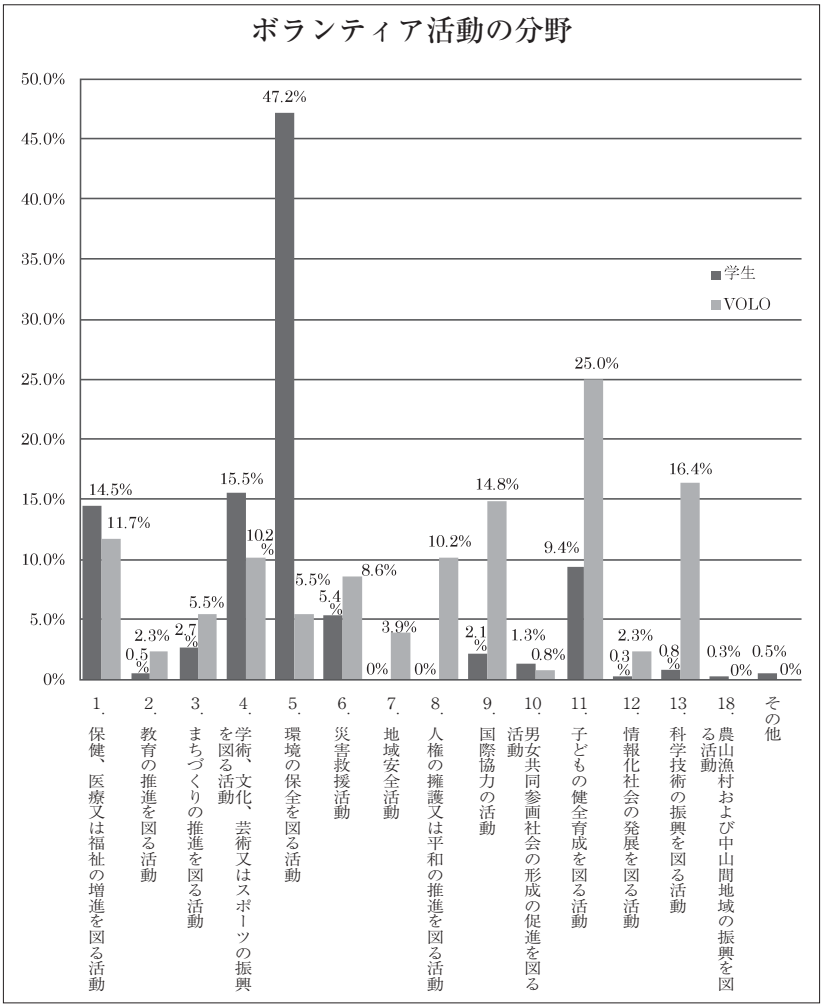
用意した枠組みに合わないところはあったが，その原因も明確で，理由のわからない不明やその他という項目がほとんど出なかったので，同じようなことを記述していることが分かった。

その結果，まず，学生とボランティアの達人の単純なデータの違いを比較してみよう。年齢の違いや，読者を意識して書かれた達人の体験は，必ずしも全くの「初めて」の体験ではないだろうという違いはあるにしても，様々な違いに驚きの連続だった。

**①体験の違い（表 1）**

活動分野をNPO法の 20 分野に合わせて整理してみた。初体験として 14 の活動分野が出てきたが，学生では約 50% が「5．環境整備」で突出していた。さらに「4．文化・スポーツの振興」と「1．医療・福祉」の分野を合わせると約 80% になり，この 3 分野でほとんどといってもいい結果になった。一方，達人は「11．子どもの健全育成」が 25% と少し多いが，多様な活動分野を初体験としてあげていた。

表 1　活動分野（数字はNPO法の 20 の分野）
学生N＝375　ウォロによる達人N＝128



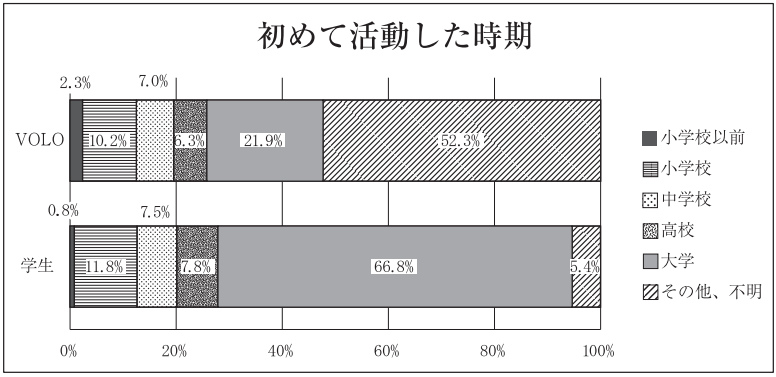

**②時期の違い（表 2）**

初めてボランティア活動にかかわった時期も大きな違いが出た項目である。学生は約 3 分の 2 が大学生になって初めて体験しているが，達人はその

他が約半分。これはこの区分で行くと，社会人になってからの体験が多いということを示している。おそらく達人と言われるまで活動を継続するきっかけになった活動に出会ったのが，学生時代でなく，社会人になってからということなのだろう。

時代の相違や年齢の違いもあるだろうが，学生は 20 歳前後。達人の執筆時点で分かっている人の平均年齢は 55.4 歳で，社会が認める達人になるにはそれなりに年輪を重ねなければならない。本学の学生，ウォロ掲載の達人たち，いずれも初めての体験が大学入学の 18 歳以後がそれぞれ 72.2%，74.2% を占めていることを考えると，平均 55.4 歳の人の子どものころから現在に至るまで，小・中・高の学校在学中にボランティア活動にかかわることはほとんどなかったと言えるだろう。

**表 2　初めての活動時期**

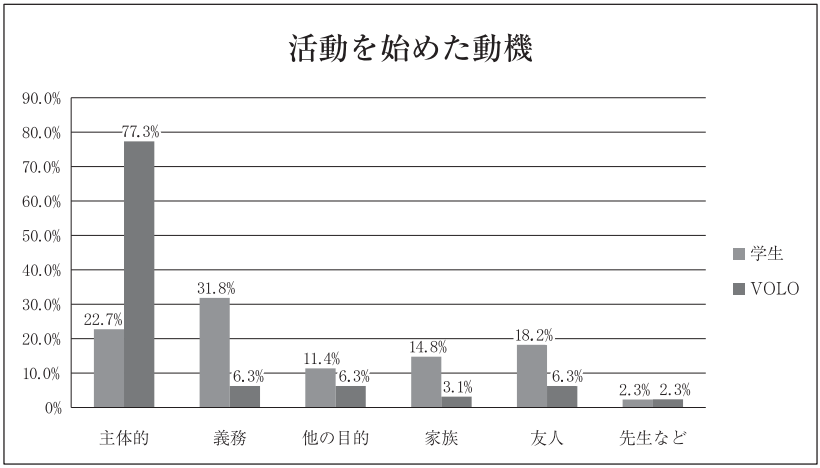



**③活動の動機（表 3）**

達人は圧倒的に主体的に自分の意思で活動を始めているのだが，学生は先生に言われてとか，クラブの活動でとかの義務が 30% もあるし，家族や友人など身近な人に誘われてというのが 33% にも上っている。主体的に活動

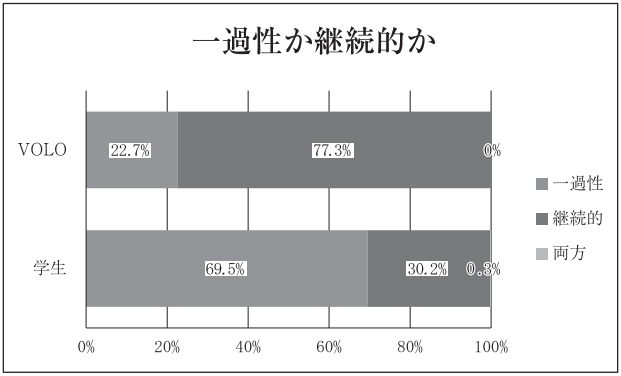
を始め，達人になるような人材は，本学にはほとんどいないということになる。この授業で半ば強制的にでもボランティアの世界に足を踏み入れた若者の 30 年後を楽しみにしたい。

表 3　活動の動機




**④活動の継続性（表 4）**

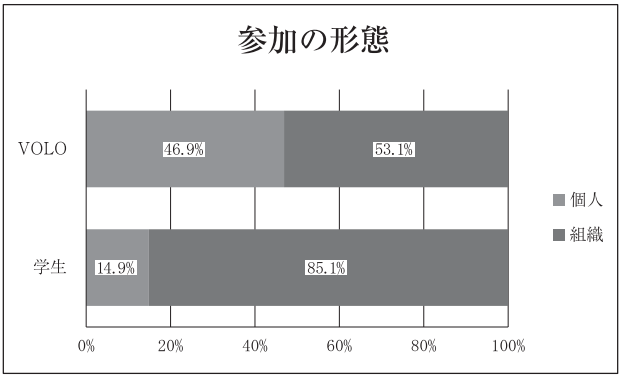
表 4　活動の継続性



このグラフでもわかる通り，初めてのボランティア体験に主体的に関わらなかった多くの学生は１回だけの体験で活動を終わってしまっているのに比べ，達人は圧倒的にその活動を継続している。継続している活動こそがボランティア体験だと思っているということも言えるが。

**⑤参加の形態（表 5）**

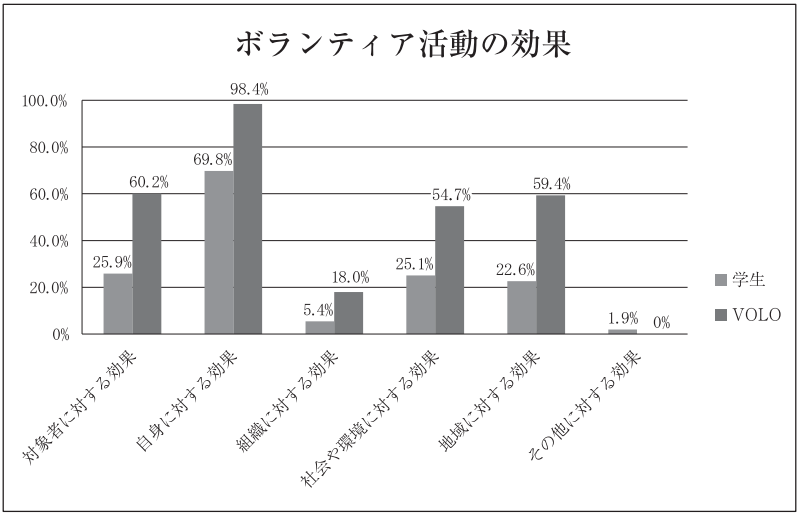
表５　参加の形態




学生のほとんどが組織の中に入って活動しているのに比べ，達人は半分以上が，最初から個人的に活動している。組織に参加するというより，自分（たち）のしたい活動を自分たちで作って参加している。これもやりたいことを明確に持っている達人と学生の主体性の違いだろう。

**⑥効果（表 6）**

表 6　活動の効果




そして，その活動の効果で何が一番なのかというとき，達人はほぼ 100％が自分自身にとって意味があったと言い切っているし，対象者にも地域にも環境にもその活動は意味があったと答えているのに，学生たちは明確にその効果をあげえていない，あるいは過小評価しかできていないのである。

**⑦コーディネート機関（表 7）**

こうした違いは何が原因なのだろうか。

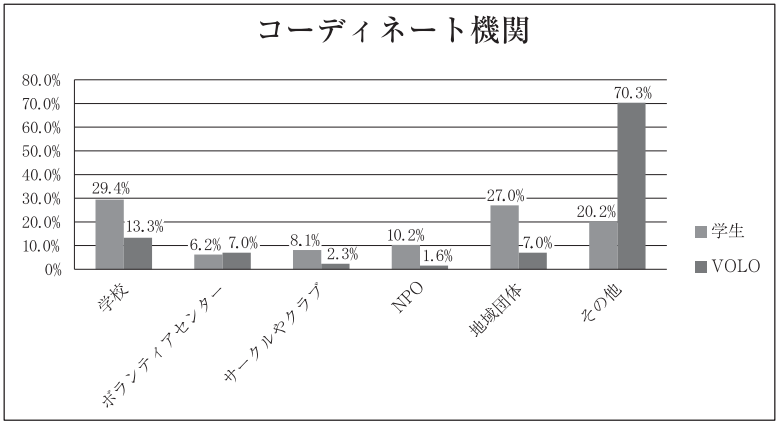
学生たちの活動のきっかけは，家族や友人から誘われ，学校や地域団体による呼びかけや，強制や義務で活動に参加し，自分でやらなければならないテーマがある訳でない。一方，達人たちは今，これをやらなければならないと強く意識して主体的に活動を始めているのである。

達人たちが活動を始めた時代にはまだNPO法人というものが十分機能し

ていなかっただろうし，ボランティアセンターもどこにでもなかった時代かもしれない。学校も児童・生徒たちにボランティア活動を体験させようという意識がなかっただろうし，エリア型の活動をボランティア活動だとは思いもしなかった時代だろう。達人たちはその多くがきっかけになったコーディネート機関は「その他」で，実は自分と仲間でという答えが圧倒的だった。

つまり，作られた団体の中で活動するというより，自分たちで活動の場を作ることから始めているのである。そして，させられた活動というより，自分たちで始めた活動こそ，ボランティアのボランティアたる活動と認識しているのである。

表7　コーディネート機関




日本社会におけるボランティア活動の位置づけそのものが変わっていたと言ってもいいだろうが，それにしても，この主体性はどこから育まれたのだろうか。

地域や学校でたくさんの人数の若者や子どもが一斉に活動しようとすれば，草引きやごみ拾いなどの環境整備の活動が最も手っ取り早い活動なのだ

ろう。特別な技術や道具も不要で，結果も活動もだれにも理解できる活動が，草引きやごみ拾いなどの環境整備の活動なのだろう。

しかし，ある種の義務で参加してもそれを継続することは難しく，多くの場合，その活動を継続し，ボランティアの意義を感じ，その過程で自身が成長し，達人，つまり組織の責任者や呼び掛ける側に回ることなく終わってしまうのだろう。

これらの結果，やらなければならないテーマを見つけることができ，主体的に自分たちで活動を作り出したかどうかが，現在の大学生と，現在の日本でボランティア活動を作り出し，支えてきた達人を大きく分けているように思う。

## 達人への道

ではどんな学生が達人となる可能性を秘めているのだろうか。

まず学生の中で達人と同じパターンの回答をしているものを探してみた。つまり，

①体験の違い　：　自分の興味ある活動，ここでは環境整備以外の活動
②時期の違い　：　社会人になってという選択肢はないから，大学生になってから
③活動の動機の違い　：　主体的に自分から
④継続的か一過性か　：　継続性のある活動
⑤組織か個人か　：　個人的にやりたいことを
⑥効果　：　自分自身にとって
⑦コーディネート機関　：　依存していない

探してみると，一人もこの達人パターンに当てはまる学生はいなかった。②，⑤を外してやっと 3 人の学生がこのパターンにはまった。回答者 375 人

中３人しか，柔軟にとらえた達人パターンに当てはまる学生はいなかった。達人への道は遠い。学校教育とボランティア活動の溝は深い。

## 結論

つまり，今の日本の学校教育では，社会人になるまで主体的に活動しようというテーマは見つからず，人に誘われて，組織に入ってしかボランティアはできず，自分の人生に大きな影響を与えるような活動に出会わず，受験やクラブ活動で多忙な若者にボランティアを継続的に関われるような環境が整っていないということなのだろう。

これからの日本の若者のボランティア教育を考えるうえで，大いに考えさせられる結果となった。

ただ，学生時代に参加していたクラブ活動を，今は継続していないが，ボランティアとして，スポーツのコーチなどそのクラブの運営や指導にかかわっている学生が想像以上に多かったことを考えると，学校のクラブ活動にボランティア関連のものをもっと多様に組み込むことが必要だろう。

日本におけるボランティア活動をさらに盛んにするために，教科以外の次のことを考えた学校教育を期待したい。

①地域課題を自分で発見できる力の育成
②主体的に行動できる力の育成
③創造的に自分で活動を作り出せる力の育成
④自分の行動の自分自身に対する効果を認め，さらに活動を進めようとする力の育成

参考文献

月刊VOLO　1997.4～2014.3　大阪ボランティア協会

# A Consideration of Learning about Volunteering
## —— Based on the Analysis of Essays by Students Taking Theory of Volunteerism Class

ISHIDA Yasunori
FUKUYAMA Masakazu
KANEMOTO Takuya

We conducted a study on volunteering by comparing essays written by college students about their first volunteering experience with essays by so-called “expert volunteers” taking a leading role in the volunteering movement in Japanese society today. The essays were analyzed with reference to seven aspects, including the type of activity, when and for how long it was carried out. Our analysis found significant differences in every aspect, and that no student shared similarities with experts. The results indicate that volunteerism programs at Japanese schools fail to develop human resources capable of continuing their activities as a volunteer, in other words, capable of incorporating their activities in this field into their daily life and leading society in terms of volunteering. We expect that programs at schools will be improved.

Keywords : volunteer, first experience, learning, school education, active learning